

理学療法士は、病態と病期の2軸を踏まえて対象者の特性を把握し、適切な理学療法を展開することが求められる。

本特集では、慢性期の理学療法について、概念と役割、目標設定、治療・介入の効果について、その適用の実態を含めて整理することを狙いとした。

■慢性期の概念と理学療法の役割（岩田 篤，他論文）

慢性期リハビリテーションは、生活機能維持や自立生活促進が主な役割と考えられている。しかし、患者の病態や回復過程が一樣でないことから、その役割については再考すべき点がある。また、獲得した機能・能力が在宅復帰後、短期的、長期的、また状態変化時に低下するといった問題も生じている。これらに対しては、回復期と慢性期との連携や他職種との連携を深めるとともに、慢性期でも身体症状を科学的に捉える視点が重要であると考えられる。

■慢性期脳卒中患者に対する理学療法の目標設定と治療・介入効果（原田和宏論文）

脳卒中慢性期における理学療法の無作為化比較試験のエビデンスを紹介し、慢性期に行う理学療法が効果的かどうかという点を説明する。そして、理学療法の一つの構成要素である目標設定についてエビデンスを概観し、慢性期とどう向き合うべきかという論点をわかりやすく説明する。脳卒中慢性期の目標設定では、患者が主体となり、数値設定の意義を認識し、専門職者と利用者の双方がしっかりと認識して共有するためのコミュニケーション体制の重要性が説かれている。

■慢性呼吸器・循環器疾患患者に対する目標設定と治療・介入効果—理学療法管理と急性増悪の予防・対応（田畑 稔論文）

少子高齢化の影響により今後、病院機能の再編が予定され、急性期や回復期の病期は短縮化し、呼吸器疾患や循環器疾患の理学療法も慢性期に重点が置かれるものと推測するが、慢性期の診療エビデンスは数多く存在している。本稿では、最新の呼吸器、循環器疾患の診療ガイドラインが推奨する項目から慢性期疾患管理と理学療法の目標設定と治療・介入効果について述べる。

■運動器疾患患者の慢性痛に対する理学療法の目標設定と治療・介入効果（櫻井博紀，他論文）

運動器慢性痛では、病態が複雑なため多角的な治療が必要で、身体面に加えて心理社会面も含めて包括的に捉えQOL向上をめざすことが目的となる。そのため、患者との信頼関係を築いたうえで、痛みだけでなく痛み行動をマネジメントし、患者自身が痛みをコントロールできるようにしていく必要がある。理学療法が貢献できる部分は大きく、他医療職および患者と共同し、痛みの悪循環を断ち切る役割を担うことが望まれる。

■慢性期理学療法の適用と効果—回復期リハビリテーションから継続した治療的な理学療法が必要な病態と環境介入（大淵修一論文）

回復期リハビリテーションから継続した理学療法が必要な病態とそれに必要な環境介入を明らかにするために、回復期リハビリテーション病院の療養型病床および診療所4,787施設を対象に、標準的算定日数を超えてリハビリテーションサービスを提供した患者について調査した。1,936施設(40.4%)から回答が得られた。入院の49.3%、外来の15.1%では長期リハビリテーション介入を必要とした患者はいなかった。病態像は運動器、脳血管疾患ともに合併症などにより標準的なリハビリテーションサービスが実施できないものが主要な要因で、続いて復職などを目的としたフォローアップの必要な病態像が明らかになった。

こうした患者へ対応するために、地域リハビリテーションに際しても医学的な検査が行える環境、医学的なモニタリング機器などの環境が整えられることが必要であると考えられた。また、復職などを目的としたフォローアップについては、IT機器などの活用による遠隔的な指導環境の整備も有用ではないかと考えられた。